

氏名	はし かわ ひろ ゆき 橋 川 裕 之
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学位記番号	文 博 第 399 号
学位授与の日付	平 成 19 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	文 学 研 究 科 歴 史 文 化 学 専 攻
学位論文題目	コ ン ス タ ン テ ィ ノ ー プ ル 総 主 教 ア タ ナ シ オ ス と 末 期 ビ ザ ン ツ 帝 国 の 危 機

論文調査委員 (主査) 教授 服部 良久 教授 南川 高志 教授 小山 哲

論 文 内 容 の 要 旨

本論文で考察されているのは、13世紀から14世紀にかけて、ビザンツ皇帝アンドロニコス2世パライオロゴス（在位1282-1328年）の治下、コンスタンティノープル総主教を二度務めたアタナシオス（在位1289-93, 1303-09年）の政治である。

ビザンツの総主教としては異例ともいえるアタナシオスの改革的試みは、同時代人らに強烈な印象を与えた。このアタナシオスに関する研究は、中心史料である書簡の多くが未公開の状態に留まっていたこともあり、20世紀後半に至るまでほとんど現れなかった。しかし、書簡の校訂作業が漸次的に進展するにつれ、彼の政治はビザンツ教会史におけるラディカルな改革運動として積極的に評価されるようになった。代表的なアタナシオス研究者であるブージャムラは、アタナシオスの改革対象が主教団、大教会（聖ソフィア教会）聖職者および一般聖職者、教会シスマ勢力であるアルセニオス派、修道士全般、そして帝国内に居住する異端および異教徒にまで及ぶものであったことを示した。次いで、それぞれの対象勢力ごとに問題の状況とアタナシオスの対処を詳細に検討した結果、その試みは、教会の秩序回復と総主教権威の強化を通じて、深刻な危機に直面した帝国の再建を図るものであったと結論づけた。

ブージャムラの研究は学界において好意的に迎えられ、論文等でアタナシオスが言及される際には必ず引用されるスタンダードとなったが、それにはいくつかの無視できない問題点がある。一つは、彼がテーマ別のアプローチを主に用いたことによって、アタナシオスの思想や政治の時間的変化、あるいはそれらと当時の政治・社会的コンテクストとの関係がいささか不明確になっていること。いま一つは、ブージャムラはアタナシオスの教会改革の広がりを描くことに傾注しているため、それぞれのテーマに関する記述が厚みを欠いていることである。したがって、本論文ではアタナシオスの総主教政治を同時代のコンテクストおよび彼の政治的経験に即して把握し、その実態と意味を突き止めることが課題として設定される。

第1部「アタナシオスの教会改革」では、アタナシオスが総主教として試みた教会改革、とりわけ主教団の居住地問題への対応が通時的に考察される。第1章「禁欲主義的改革者の登場」では最初の在位期が対象となる。テーマ別のアプローチを採用した主要な先行研究においては、アタナシオスの二度ある在位期の相違に十分な注意が払われず、彼はあたかも当初から不変の目標を持った改革者であるかのように描かれてきた。たしかに、同時代史家ニケフォロス・グレゴラスはアタナシオスが最初の総主教就任後、教会の全面的改革に即座に着手したかのような記述を残している。しかし、当時の大教会聖職者の一人としてアタナシオスを間近で観察する機会があったゲオルギオス・パキュメレスは、グレゴラスとは異なる証言を伝えている。アタナシオス自身のそれを含む様々な証言を突き合わせると、彼がこの段階では必ずしも教会の全面的改革に着手していなかったことが明らかになる。彼は首都に滞在する主教団に対してではなく、修道士一般に対して改革の熱意を差し向けていた。しかし、彼が修道士に対して改革を試みたことは、標的となった修道士だけでなく、それを目撃した大教会聖職者の嫌悪をかき立てていた。総主教に対して彼ら聖職者集団が開始した政治運動は一部修道士や主教団をもその陣営に取り込み、結果、アタナシオスは抵抗を断念して総主教位を辞した。

第2章「教会の破滅と神の怒り」では辞任したアタナシオスの政治的認識と復位に至るまでの行動が検討されている。1297年秋、アタナシオスが総主教座を去る直前に聖ソフィア教会の内部に隠し置いていた破門状が発見された。この事件を契機として、彼は自らの見解を記した書簡を皇帝に送り始めた。その皇帝宛ての書簡の文面を通じて確認できるのは、彼が自らの辞任の原因を皇帝の変心と首都に滞在する主教団の政治活動に求めていたことである。一方、13世紀末から小アジア西部におけるトルコ人勢力の征服活動が活発化する中、アタナシオスはビザンツの民に対する神の怒りがその激しさを増していると認識していた。彼の考えでは、その神の怒りを静めるためには、皇帝を筆頭にビザンツの民はすべて真摯に悔悛しなければならなかったし、首都にいる主教は教区民のもとに帰還しなければならなかった。つまり、アタナシオスは一修道士として暮らす間に、教会の問題の所在を再認識し、改革の主要な標的を首都の主教団に定めていたのである。

続く第3章「教会改革の急進化とその政治的コンテクスト」が扱うのは、1303年に復位したアタナシオスの政治の実態である。アタナシオスの二度目の総主教位は新たなシスマとともに始まった。すなわち、アタナシオスの後を継いだ総主教ヨアネス（在位1293-1303年）とアタナシオスの政敵であるアレクサンドリア総主教アタナシオス2世を支持する主教団がアタナシオスの復位に反対し、教会から離脱したのである。この事件は教会の乱れの原因が主教団にあるとしたアタナシオスの認識をより強固なものとした。もう一つの問題である皇帝の支持を固めていた彼は、主教団の首都からの退去を求め、皇帝に幾度となく書簡を送った。その結果、皇帝はアタナシオスに協力を示し、1304年には反アタナシオス派のシスマを収束に導き、さらには1305年、主教団の多くを首都から退去させた。皇帝に請願の書簡を送る以外で、アタナシオスが主教団を退去させるために取った方策は、物理的に教区へ出発することが困難な主教に臨時教区を授与すること、その行政措置の決定後に、当該の主教へ直接書簡を送ることであった。主教団を退去させたアタナシオスは、彼にとってトラブルの根源であった常設教会会議の開催を停止し、それに代わる組織として、修道院長から構成される会議を設置し、彼らとの協同で教会の日常的問題に対処した。こうして一定の成果を挙げることは成功したものの、アタナシオスの改革は不徹底に終わった。というのも、1305年秋以降、総主教の意向に反して一部主教が首都に留まることを皇帝が黙認したからである。これは、皇帝がアタナシオスへの支持を留保し、さらに彼に敵対的な主教が首都に存在するという二つの点で、アタナシオスの総主教位の政治的安定性が大きく失われたことを意味した。

このようにアタナシオスの教会改革が時間軸にそって検討された第1部に対して、第2部「アタナシオスとアトス山」ではアタナシオスとアトス山の関係の解明というテーマが設定され、プロソポグラフィと制度史的な観点から考察が試みられている。先行研究が等閑視してきた問題の一つが、アタナシオスとアトス山の関係である。アタナシオスは総主教として、ビザンツの著名な聖山（山岳修道院共同体）であるアトスに従来の総主教には見られない、ひととき強い関心を示したことが史料から読み取れるが、両者の関係を明らかにした上で、それがアタナシオスの総主教政治にとって有した意味を明らかにすることが具体的な目標とされている。

第4章「ラウラ修道院長の登用」では、総主教となったアタナシオスが、従来の総主教による主教人事と一線を画し、アトス山内の最有力修道院メギステス・ラウラの院長を高位府主教に登用していたことがプロソポグラフィ分析によって論証される。アタナシオスによって登用された可能性がある修道院長は、ヤコボス、マラキアス、ニフオンの三名である。ヤコボスはアタナシオスの最初の在位期に、マラキアスは二度目の在位期に、それぞれテッサロニケ府主教を務めていたことが確認されている。ニフオンは二度目の在位期にキュジコス府主教の地位にあり、アタナシオスの辞任後は総主教に選出された。アタナシオス以前の時代においてラウラの修道院長が教会の高位聖職を授与される例はほとんど確認できないのに対し、彼ら三名がアタナシオスの在位期に府主教として確認されるのはなぜなのか。彼らが言及される諸史料を精緻に分析した結果、彼らがアタナシオスによって登用された可能性がきわめて高いことが判明する。高名なビザンツ教会史家メイェンドルフはヘシカスト論争以降の教会とアトスの緊密な結びつきを指摘したが、アタナシオスはラウラ修道院長を介する形で、教会とアトスを結びつけていたと論者は説く。

アタナシオスとアトスの関係は教会人事の面のみに留まらない。第5章「アトス山の内紛と管轄権問題」で考察されるのは、アトスの内紛と管轄権をめぐる問題である。アタナシオスの再度の辞任から3年を経た1312年、総主教ニフオン（在位1310-14年）と皇帝アンドロニコスはそれぞれアトスに宛てて証書を発行し、アトス全体に対する管轄権を皇帝から総主教に移行する決定を下した。実のところこの決定は、アタナシオス時代にすでに決定していた事項の確認という形を取って

た。アタナシオス時代の決定を記した証書は現存しておらず、それに言及しているのは1306年ころにアタナシオスがアトスへ宛てた私信的書簡のみである。アタナシオスはその書簡において、アトスの教会からの独立を憂慮した皇帝が、それを教会に回帰させる決定を下したとして皇帝の主導を強調している。しかし、アトスに送られたアタナシオスの一連の書簡をよく観察すれば、管轄権の移行に関する決定がアトス山内の騒乱と関連していたことが判明する。騒乱はまずラウラ修道院の内部で生じ、次いで、中央統治組織プロタトンをも襲った。こうしたアトス山内の問題を深く憂慮したのは皇帝というよりむしろ、総主教のアタナシオスであった。彼はラウラ修道院やプロトス、山内の修道士全員に宛てて、上長への服従と秩序の回復を強く求め、ラウラの問題に関しては同院の指導的修道士層と密に連絡を取っていた。彼はアトスを教会の管轄下に戻すことによって、事態の收拾を図ろうとしたのである。しかし、この問題を通じて見えてくるのはアタナシオスと皇帝の関係でもある。アトスの状態を深く憂慮したのはアタナシオスの側であったかもしれないが、皇帝は教会の平和が帝権の安定を導くという観点からアタナシオスの要請に同意し、自らの権限によってアトスの独立を解除した。つまり、皇帝はこの段階においては、帝権にとっての利益を追求する政治的道具として総主教を用いていたのである。

二つの補論はアタナシオスの言葉と著述をめぐる非政治史的考察である。補論1「アタナシオスの直筆写本は現存するか?」では、アタナシオスの直筆写本の問題が古文書学的な見地から議論される。筆者は関連する複数の写本の筆跡を検討し、アタナシオスの直筆書簡が確かに現存すること、そして彼がアタナシオス書簡集（ヴァチカン写本）の作成に部分的に関与していたと結論づけている。補論2「声を救う—アタナシオス書簡集の起源について」は歴史・文献学的な考察である。ここでの問いは、アタナシオスの書簡集がなぜ現存するのか、というものである。筆者は特定の書簡テキストの文面とそれが書かれた当時の政治状況を検討し、特定の時点でアタナシオスが意図的に自らの書簡の写しを保存し始め、この写しの集積がヴァチカン写本となっていることを一つの仮説として提起している。

以上の補論を含めた本論文全体の考察の結果、アタナシオスの総主教としての試みは、禁欲主義的で厳格主義的な修道士集団による教会の支配および正教住民の指導を確立することを志向した、きわめてラディカルな教会改革であり、教会の統治に関してはアトス山とそこに暮らす修道士らの存在がひときわ重視されていたことが新知見として提示される。古代の預言者や教父を行動モデルとした一人の修道士と彼を取り巻く様々な環境との相互作用に焦点を当て、その改革が13世紀から14世紀にかけて帝国社会を襲った深刻な危機の中でダイナミックに変遷する様相を解明した本論文は、中世後期のヨーロッパとビザンツ、それぞれの地域で進行した社会・政治的諸変化と教会および修道院の改革運動を比較考察するための重要な素材を供している。

論文審査の結果の要旨

第4回十字軍が建国したラテン帝国を1261年に滅ぼし、首都コンスタンティノープルを回復したパライオロゴス朝の下でビザンツ帝国は、イスラーム諸勢力の進出による領土縮小など絶えざる危機のなかで、1453年まで存続した。この後期ビザンツ帝国は修道院や神秘思想が政治的影響力を強めたことから、欧米の啓蒙主義史学や日本の戦後歴史学において研究者の関心を引くことは少なかったが、1970年代には同時期の重要な史料の刊行が進捗を見たことから、ようやく本格的な実証研究が行われるようになった。メイエンドルフやオストロゴルスキーなどビザンツ史研究の大家によれば、14世紀後半以後帝国では、従来の聖俗両界における「教養エリート」に対して、修道士的な経歴と理念を持つ「禁欲エリート」が政治的影響力を強め、「修道士と聖山（山岳修道院共同体）の政治化」と呼びうる傾向が強まった。修道士（隠修士）としての前半生を経て、その名声により皇帝の要請を受けてコンスタンティノープル総主教となったアタナシオスは、二度の在位（1289-93/ 1303-09年）を通じて急進的な教会改革を試みたが、高位聖職者の反発等により、辞任を余儀なくされた。本論文は後に聖人とされたアタナシオスによる教会改革の理念と経緯を、同時代の史書、聖人伝、そして200通近く現存する彼の書簡等の厳密な考証、精査により、詳細に解き明かす。アタナシオス個人の徹底した伝記的研究から、この修道士的禁欲精神に貫かれた聖職者の改革が、同時代の政治的、社会的状況と切り結ぶダイナミックなプロセスを再現し、これをメイエンドルフらの言う「禁欲エリート」時代の準備期として明らかにしたことは、本論文の最大の功績である。

以下に本論文の、とくに評価されるべき点を挙げる。

第1に、アタナシオスのもとより、関係する聖職者、修道士、貴族のプロソポグラフィ、皇帝との関係、改革の施策、

その効果に関する事実等の正確な把握をめざし、関連史料の厳密な検討と再解釈により、先行研究を批判、修正し得たことである。論者が用いた史料の多くは1970年代に校訂版が刊行されたものではあるが、アタナシオス研究にとってもっとも重要な書簡集については、論者は補論において、そのマニュスクリプトの筆跡考証と写本伝来の考察から、アタナシオス自身が現存書簡集の成立に直接関わっていたことを有力な仮説として提示するなど、研究の史料的基盤固めはきわめて周到である。

第2は、伝記史料（死後に記された二篇の聖人伝）の慎重な読解により、これまで軽視されてきた総主教就任以前のアタナシオスの前半生に光をあてたことである。それによりアタナシオスが帝国各地の聖山を遍歴しつつ、後の改革を生み出す理念を育み、またそのなかで隠修生活の理想の地としてアトス山を見出したことを確認し得た。このことはアタナシオスの改革の再解釈に大きく貢献するものである。

第3は、近年の最も重要な成果であるJ・ブージャムラの研究が、アタナシオスを変わらぬ理念を持つ一貫した改革者と捉えるのに対し、論者はアタナシオスが在位第一期には修道士の改革に重点を置いたこと、そして辞任後の在野時代に教会政治の現実的、政治的認識を深めた後、在位第2期には首都に滞在して改革に抵抗する主教の退去、任地帰還を、「神の怒り」を鎮め、帝国を危機から救う喫緊の課題と考えるに至ったことを実証した。アタナシオスの修道士的理念と帝国政治の現状の相互作用のなかで、改革が重点の移動をともないつつ推進され、一定の成果を上げ、頓挫する歴史のプロセスを動的に描き出す論者の柔軟な視点と解釈は評価されてよい。

最後に、やはり先行研究が等閑視してきた聖山アトス、とりわけラウラ修道院とアタナシオスの改革の密接な関係を、その理念のみならず、同修道院長の府主教への登用という人的レベルにおいて明らかにしたことが挙げられる。とくに3名の府主教についてこのことを、徹底したプロソポグラフィの手法により確認したことは、今後のアタナシオス研究、そして同時代の帝国政治史、教会史研究に対する多大の貢献をなすものである。

このように本論文が、アタナシオス研究に様々な新知見を加えたことは明らかであるが、その結果生み出されるアタナシオス像が、「禁欲エリート」の時代と言われる14世紀後半以後のビザンツ史の再解釈にどのような貢献をなし得るのかは、明確に示されてはいない。そのためには、アタナシオスと皇帝、高位聖職者のみならず、帝国の社会と教会、信仰生活の現実といった広がりのある考察が必要であり、それは論者も次の課題として認識するところである。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2007年2月22日、調査委員3名が論文内容とそれに関連する事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。